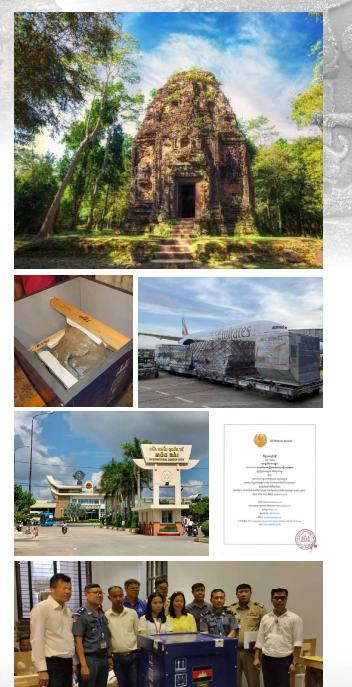


## ガネーシャ像 誘致プロジェクトの始まり

カンボジア世界遺産『サンボーブレイック』に訪問した 2017 年。博物館で対面したのは 1300 年前に、砂岩で彫られたガネーシャ像。全体的に丸く、現代のガネーシャ像とどこなく違う。今まで見たことがないガネーシャ像でした。聞けば、こちらのガネーシャ像は盗掘され隠されていたとのこ。遠く離れたバライ村で保護されコンボントム博物館に展示されるまで、何十年、何百年と暗い納屋の中の移り変わりを経て陽の目に当たるのをじっと待っていたのだろ。盗掘した犯人は捕まらなかったため、正確な発掘地は未だ不明とのことだが、カンボジア文化芸術省の見解では 7 世紀前半（アンコール王朝が始まる前チエラ）と呼ばれていたころの（王都）のガネーシャ像と言われる歴史的文化物であった。“困難や障害を取り除き、福をもたらす。豊穣や知恵、商業の神様” ガネーシャ像と言われるが、一体このガネーシャ像はどんな困難を乗り越えて今に至ったのだろう。国外に出たことが無い、世界最古級のこの石仏を日本で、ミネラルマルシェの来場者様に見て頂きたくて、文化財レンタルプロジェクトをスタートしました。ここに至るまでは実に、7 年の歳月を費しました。何度も渡航し、地元の方々話をし、さまざまな地位を持つ役人と会い、途中交渉が決裂もしました。またある時は、在カンボジア日本大使館までプレゼンに行きあと一歩のところ、目の前に見えたとき、コロナに入り海外渡航そのもののが難しい時期に突入し何度も諦めかかったこの、プロジェクト。零細企業が世界遺産の文化財を借りる、といい夢のようなことが、どうとう実現しました。多くの方にこちらのガネーシャ像をご覧になっていただきたいのですが、輸送や保管、展示には厳重なルールがあり常に管理されているため、お披露目できる会場・期間は限られています

※レンタル期間は 2024 年末予定

博物館を出発して飛行機でいくつもの国を超えてやってきた世界最古級のガネーシャさんに逢いに来てくれて、ありがとう。たくさん見て、写真を撮って愛でてあげてください。きっとあなたにハッピーをもたらしてくれることでしょう



## 繁栄と富の神ガネーシャ像

その姿はとても特徴的。4 本の腕をもち、大きなお腹の人間の身体に、片方の牙が折れた象の頭をもつ。「聖天」「歡喜天」「大聖歡喜双身天」、インドヒンズー名で「ガネーシャ」「ビナーヤカ」など様々な呼び名をもつ。仏教の守護神のひとつ聖天（歡喜天）はヒンドゥー教のガネーシャ（Ganeśa）がルーツといわれ、弘法大師空海さんが唐から日本に持ち帰った神様でもあります



### なぜ象の頭をしているか？



インドの三大最高神の一、シヴァとその妻パールヴァティーは身体の汚れを集めて人形を作り、命を吹き込んで息子ガネーシャを誕生させました。ある時、母パールヴァティーはガネーシャに「入浴をするので推動れないように見張りをしておいて」と頼みます。母の入浴の見張りをしていたところ、シヴァが帰還。ガネーシャはそれを父シヴァと知らず浴室を拵したことでシヴァは激怒し、ガネーシャの首を切り落として投げ捨ててしまう。後にそれが自分の子供だと知ったシヴァは、投げ捨てたガネーシャの頭を探しに西へ旅に出かける。だが、どんなに探しても見つけることができなかつたため、旅で出会った象の首を切り落として持ち帰り、ガネーシャの頭として取り付け、復活させたという（翻訳あり）

### ガネーシャが持っているもの

4 本の腕を持つガネーシャ。それの中には斧や輪綱、聖水の入った壺、そしてガネーシャ自身の折れた牙を持っている。

なぜ自身の牙をもっているのか？ 2 つの所説を紹介します。

インドの聖典『マハーバーラタ』の著者ヴィヤーサは文字を書き出しが出来なかった。3 大祭の 1 柱ブラhma に選ばれたガネーシャは、文章が書けないヴィヤーサの言葉を書き留めるために自ら右の牙を折り、その牙で執筆したのだと。もうひとつの話は、誕生日にお菓子をたくさん食べた帰宅道。乗っていたネズミが勢に驚き、ガネーシャは転倒しお菓子が溢れこぼれてしまった。急いで拾いお腹に廻し、ハビでお腹を巻きつけたガネーシャ。この一部始終を見ていた人が嘲笑ったことで、自分の牙を折り月に投げつけた。ここから月は、落ち欠けするようになったそう。

また、ガネーシャの足元にはネズミ、お腹にはハビが描かれることの由来でもあるぞ。



## ガネーシャ像が見ていた、 カンボジアの歴史

クメール人が建てたカンボジア王国（真臘・しんろう）全盛期の王朝。真臘は 8 世紀に分裂していたが、802 年にアンコール朝のジャヤヴァルマン 2 世によって統一した。その後、アンコール帝国とも言われて歴史が続いた。12 世紀のスールヤヴァルマン 2 世の時、チャンバーヤ、タイ・ビルマ方面まで征服して領土を拡大し、使節を宋へ派遣して朝貢した。最も重要な事績が、自ら信仰するヴィシュヌ神を祀るヒンドゥー教寺院としてアンコール＝ワットに建造したことである。トレンサップ湖の北岸にあたり、アンコール朝の代々の都であったアンコールは、「都市」を意味するサンスクリット語「ナガラ」がクメール語化したもの。9 世紀以降、アンコール朝の諸王はこの地を中心にインデシナ半島を広範囲に支配し、道路網を築いた。都の周辺にはバライという貯水施設を多数建設し、水路をめぐらしていた。その中心部には都城であるアンコール=トムがあり、その南にもヒンドゥー教の寺院として造られ、後に仏教寺院となったアンコール=ワットの巨大な石造建築群が残っている。アンコール朝は 14 世紀にチアイのアヤタ朝に押されて首都をブノンベンに移したため、アンコールは荒廃して忘れ去られ、ジャングルの中に埋もれている状態であったが、20 世紀にフランスがカンボジアを保護国としてから、西欧にその存在が知られるようになつた。またカンボジア内戦期には戦場となり、ボル＝ボト政権によって文化財の破壊も行われて荒廃が進んだため、国際的な復興の援助が始まっている。



世界史の窓「世界史用語解説 授業と学習のヒント」から抜粋  
[https://www.y-history.net/appendix/wh0202-007\\_z.html](https://www.y-history.net/appendix/wh0202-007_z.html)